

ホウライチクの開花とその対策について

令和6年7月
森林技術総合センター

1. 開花の周期について

開花の周期は30～40年と言われています。
(参考:「暮らしに生きる竹」濱田甫 著)



ホウライチクの開花

2. 開花の原因について

周期説や病菌説, 環境説, C/N比説など諸説ある中で, 周期説が最も有力な説といわれています。永年にわたって地下茎での無性的な繁殖を繰り返している間に, その連年りの地下茎に開花期が訪れ, そこから出ている竹は開花するとみられています。
(参考:「竹・笹の話」室井綽 著)

3. 開花の影響について

開花した竹稈(樹木でいう幹の部分)は枯れますが, 地下茎は生きているため, 細くて小さい再生竹が発生します。そして, しばらくはタケノコの収穫は期待できません。

4. 開花への対策について

開花した竹稈は, 再生竹の妨げになるため取り除きます。

再生竹は, 切らずに残し, 光合成による地下茎への養分供給をさせ, 再生竹の株元に施肥を行い, 地面が乾燥すれば散水を行います。なお, 増殖を行う場合は, 開花後の結実と比較的多いため, 結実した種子から実生苗を作ります。



株立ちしたホウライチク

5. その他

①用途(食用, 工芸用)について

7月中旬頃から食用として収穫され, 方言でキンチクやキンチツダケと呼ばれています。また, 竹材としては籠や縄などの日用品に加工されます。

②県内の分布について

熱帯性タケ類で、導入された時期は不明ですが、本県では十七代薩摩藩主 島津義弘（1535～1619年）が火縄銃の火縄用として植栽を奨励していました。株立ちするため、山や畑の所有境界として植えられており、県内一円に分布しています。また、河川沿いにも水害防備用として多く植えられています。

③県内での主な病気とその対策について

ア. スス病

竹稈や枝葉がスス病菌に侵されると、まるで煤が付いたように黒くなります。葉に付くと光合成を阻害し地下茎への栄養供給が不足します。枯死するほどの被害は出ませんが、タケノコの収穫量が少なくなります。スス病菌の栄養は、カイガラムシやアブラムシの排泄する甘露です。防除法は、竹稈や枝葉にカイガラムシやアブラムシの付着を多く発見したら焼却処分を行います。



アブラムシとスス病

イ. 天狗巣病

枝が天狗巣病（糸状菌の一種）に侵されると、短い節の湾曲した枝が出て鳥の巣状になり、枝には正常な葉が付かなくなり、光合成を阻害し地下茎への栄養供給が不足します。蔓延しない限り、枯死するほどの被害は出ませんが、タケノコの収穫量が少なくなります。防除法は、古竹（5年生以上）で発症しやすいため、古竹は伐って間引きします。なお、発生した場合は、薬剤が無い場合、被害部分を発見したら焼却処分を行います。なお、開花と間違えやすいため、近くで観察する必要があります。



正常



天狗巣病